研究ノート

豪雪地帯における投票先決定のメカニズム

渋谷　武

一、豪雪と選挙関係情報

昭和四二年一月総選挙は、新潟県においては、まさしく豪雪の選挙であった。特に山間部においては、激しかった。新潟県において、山間部と称せられる地域は、主として、越後山脈、三国山脈が峻嶮な大起伏をなす、福島、群馬、長野、山形の各県と境を接する地域である。それは、日本においても代表的な豪雪地帯であり、三～五米に及ぶ多量の積雪は、土地利用率を極度に低め、専業農家二七%、経営規模についてみれば、〇・五～一・〇ヘクタールの農家が四二%をしめ、二ヘクタール以上の農家は、わずかに一・三%にすぎない。そして、農業を主としつ

つ、冬季間の季節出稼、日雇、人夫（鉄道、道路の除雪等）による現金収入が彼らの生活を支える。経済的貧困は、更に、交通機関の不備な状況の中で、激化する。豪雨が山の地辷を起し、豪雪が道を閉すことは瀕繁に起る東頸城郡地区には、直江津―大川原間を軽便鉄道ともいうべき古典的鉄道が一本あるだけであり、その運行間隔は大きく、頸城鉄道バスが山道を縫って走っているに過ぎない。中魚沼郡・十日町市地区も、冬季間飯山線の不通に悩まされ、陸の孤島化することが瀕繁に起り、特に、中魚沼郡津南町は、しばしば孤立化する。テレビ、ラジオの普及が、文化的情報のこの地域へ入ることを援けているとはいえ、文化的情報の貧困もプラスされた経済的貧困は激しくなってゆく。

昭和四二年一月総選挙公示前後、豪雪が県内各地を等しく襲った。平場農村、山間部農村の区別を行なうことの特殊理由を発見しえぬ状況の中にこの選挙は行なわれたのである。積雪量の多少が、その特殊性を若干表わしたにとどまる。

公示とともに掲げられる候補者のポスター掲示板は、市町村選管により、公示前に、民家への委託を終えてはいたが、雪に埋もれていないか、適確な状況におかれているかは、各選管が頭を悩ました問題であった。次々と降り積る雪の中で、「雪おろし」ではなく、「雪掘り」の言葉で呼ばれる、屋根の雪の排除は、この選挙期間だけで、山間部では三～五回に及んだ。そのため、雪の上に設置されたポスター掲示板も、雪の壁に隠されることはもちろん、これらの雪のためにその所在さえも不明となり、急拠、新設をしなければならないこともあった。

候補者は、スレ違うこともできない雪の壁の中の一本の道を敵味方入り乱れて、列をなして通らなければならないことも屢々あった。また、候補者だけが、一台の雪上車に乗り、運動員は各候補について一名づつがジープに乗りこみ、雪上車に先導されて、立会演説会場に向うこともあった。そして、候補者は、家の影さえ見えぬ雪の壁の

中で、むなしさを感じつつも、有権者の耳へとどけと呼びかけたのである。豪雪は、候補者の活動にとって、大きな障害であった。

この選挙が、黒い霧をはらう選挙といわれ、「明るく正しい選挙推進協議会」を中心に作られた選挙スローガン「よく見、よく知り、よく考えて、投票しよう」という言葉を訴えられた有権者も、この雪の壁の中で、候補者についての情報を獲得する上で、多くの困難につき当った。

投票日前一週間の天候の安定は、立会演説会場の聴衆の入りを驚く程増加させはした。しかし、その他の選挙情報の入手は、非常に難かしかった。

ラジオの政見放送は、三回、五分以内と限られた情況の中では、ラジオは、選挙情報入手手段としては有効な機能を発揮しなかった。まして、紙上立会演説会めいたものを載せた各新聞も、ただでさえ五〇％以下の新聞購売率しか示さない山間部では、十分な役割を演じはしなかった。

選挙公報についてみれば、各市町村選管が、その配布に苦慮を続けたことであった。そして、四米内外の積雪の中で、その配布に当る市町村吏員は、常にナダレの危険に立ち向わねばならなかったのである。そして、最悪の場合、投票場において、公報がはじめて有権者の手にわたり、それを見て投票することさえあった。もちろん、これは、決して、選挙管理委員会の手落ではなかった。雪国に生活したことのない人々には、四米をこえる積雪の中での行動が、どのようなものかについて、推察することさえ不可能な筈である。

人々の通った道が、雪の上を一条たとえ細く続いていても、それは所詮一条の道にすぎない。それは、スレ違うことすらできない道なのである。この道と、表面平に雪がなっている時は特に危険である。人の踏み固めた雪道を一歩踏みはずせば、雪の中に深く沈みこんでゆき、脱出するためには、異常な体力の消耗が起る。そのまま脱出不

能となって死んだ人の例は、過去にはよく聞かれた。また、ナダレの危険が常につきまとう。こうして、雪道を歩く人々は、その神経を異常なまでにすり減らすことになるのである。カンジキの使用は、この神経の異常な疲労をやわらげてはくれるが、肉体の疲労は一段と加わるものなのである。

国費三分の二、残りを新潟県と市町村とでまかなって購入、配置された一二台の雪上車も、人間輸送に使用されるよりは、雪踏代用に利用されることが多かった。キャタピラが踏み固めてゆく二条の雪道を、子供たちが、嬉々として、学校へ走る光景にぶつかることもあった。そして、この二条の道を、有権者が立会演説会場へ、投票所へとたどったのであった。だが、豪雪は、雪上車の配備された市町村に限って、襲ったのではなかった。また、一回の降雪が五〇センチメートルを超えたような場合、雪上車のつけた道も、次のヶ所へ雪上車が廻っている間に、人の通れない状態になることさえあった。東頸城郡松之山町では、タクシーで二〇分の病院へ、この豪雪のため病人を送る際、数十時間を要したのであった。

また、県費補助で購入されたブルドーザーも、県道の除雪優先が云々され、市町村内企業のブルドーザーも、国道除雪に借り上げられてしまった町村では、町村道について、キメ細かな除雪を行なうことはできなかった。このため、職員が、雪踏みをしつつ、投票所へ投票箱を運び、泊りこむことを覚悟する事態もあった。

投票箱を開票所へ移送する際、ナダレの危険を避けるため、「峰越し」・「峰渡り」を行なわなければならない地域もあった。これは、通常の道が沢や谷間をぬってつけられているため、ナダレの危険は、この通常の道を歩む時は、つきものとなるために、とられた措置であったが、職員の労苦は、推察をはるかに超えたものがあつた。

このような状況の中で、選挙公報の投票所における手渡しも起っていたのである。そして、更に、立会演説会に代理人が登壇することも現われ、個人演説会は、従来の選挙に比べて少なかった。

このような公的な形で行なわれる選挙関係情報の伝達不良な状況・条件の中で、有権者は、何によって、その投票先を決めていったのか、その投票先決定のメカニズムが問われなければならないことになる。

二、投票先決定のメカニズム

投票先決定のメカニズムを探究するに当り一つの仮説を設定し、それに対する資料が存在するか否かを検討する方法をとる。

選挙の際、投票権を有する人間を、一つの共通の要素を持つものとして、有権者集合の名の下に把えることとする。この場合、選挙の種類、選挙区等の区別に伴ない、有権者集合も異なってくる。参議院議員選挙についてみれば、全国区の規模での選出がなされる局面では、全国の有権者が一つの有権者集合となるのに対し、地方区では、例えば、新潟県内の有権者が一つの有権者集合となる。都道府県知事選挙に関しては、各都道府県の有権者が、それぞれ有権者集合となる。従って、県議会議員、市町村長、市町村会議員等の選挙について、それぞれにそれぞれの有権者集合を考えてみることができるのである。

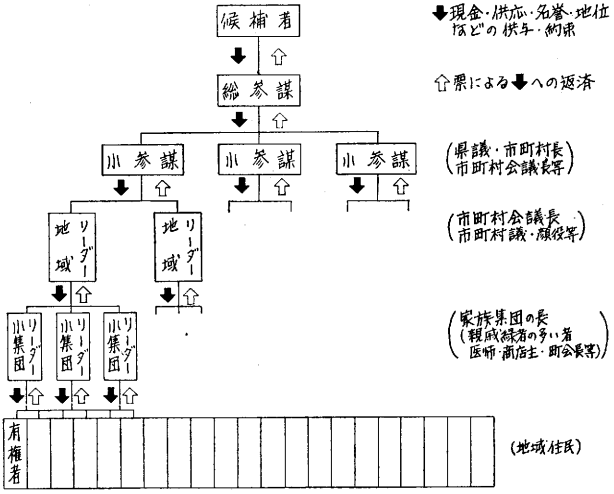
次に、これら有権者集合においては、各候補者に投票したという事実に基き、すなわち、投票先が共通であることから、「○○投票集合」という集合を考えてみることができる。(○○は、候補者名を冠することとなる。この場合、○○は、この投票集合における象徴とみなすことも可能であろう。)

投票先決定のメカニズムを追求する場合、われわれは、このような投票集合における象徴がどのような形で形成せられてゆくかを探究することによって、その点を明らかにすることができるであろう。

投票集合における象徴の更替、変動の態様の中から、投票集合における構造上の問題を明確化することも可能である。

さて、昭和四二年総選挙においては、前記のように、選挙関係情報は不足していた。そのような状況の中から、候補者と結びつき、固定化された投票集合について、ある意味で系列集合とも呼びうるものの存在についても、その実体をある程度知りうることとなった。更に、新潟県においては、特に、二十万円中元事件を中心として、いくつかの選挙違反被疑事件が存在するが、これらの事件の中から、かなりの確信をもって、この投票集合の問題を論じうる余地が現われてくる。

（図1）有権者集合の系列



候補者を中心に形成せられる投票集合については、図1の如き編成が考えられるのが通常であり、小参謀、地域リーダーは、それぞれの段階の選挙毎の小さな投票集合の中心となっている。そして、候補者の固定化に伴ない、この集合の系列化は固定的となり、候補者も、集合象徴として固定化してゆく。しかし、各集合には、強固な固定化された部分とルースな部分とが存在する。このルースな部分を集合内に引きいれ、引きとどめ、離脱を防ぐために生ずる現象が、買収・饗応等の選挙違反である。

この投票集合の象徴が人物象徴であるか、組織象徴であるかは、投票集合の変動に重要な役割を果すことになる。

投票集合の人物象徴として機能した人物が死亡ないし失脚した場合、この集合には当然一つの変動が生ずる。ただしかし、この集合の中で、特に誇り高き小参謀、地域リーダー、小集団リーダー等は、他の投票集合への移動を簡単には行なわない。新たに転入した先の投票集合でうけるであろう新参者扱いは、彼らの肯んずる所ではないのである。このように各種リーダーを、どの程度その投票集合に含んでいるかが、この投票集合の組織の強弱を占なう鍵となる。

この投票集合の緊縛力が強固であればある程、この集合は、その人物象徴を代替人物象徴で補なおうとする。そこに登場するのが、子供であり、夫人であり、兄弟である。新潟県第四区では、塚田十一郎が知事に転進して後、十一郎の投票集合は、その子徹を代替人物象徴として設定した。四二年総選挙では、第二区渡辺良夫系列集合は、その代替人物象徴として肇を推したのである。

二世候補という意味では、佐藤隆が第二区で立候補した。しかし、佐藤芳男が、衆議院議員から参議院議員に転進した時、衆議院議員佐藤芳男投票集合は解体していたのである。芳男自身、この転進を衆議院議員選挙の落選によって行なったものであった限りでは、第二区内での彼の投票集合は弱体であったとみることができるとともに、芳男の転進によって解体され、既に他の投票集合の中へ吸収せられてしまっていたのである。従って、同じく二世候補と呼ばれながら、渡辺肇と佐藤隆とでは、その事情を全く異にしてしまっていたのである。

立会演説会においても、渡辺肇は、渡辺良夫投票集合の代替人物象徴であることに徹した選挙演説を展開した。

「父は、私に何の財産も残してはくれなかったが、第二区有権者の暖かい支持という大きな遺産を残してくれた」

という呼びかけは、良夫投票集合に属した人々の心に有効な反響を呼び起すことができた。

しかし、系列集合としての投票集合を背景に持たぬ佐藤隆には、このような発言はなかった。

第四区において、今回始めて登場した高鳥修の性格は、屡々、田中彰治の身替りか否かを廻り論議の対象となったことである。しかし、この問題は、投票集合ないしは系列集合の問題として考える場合、興味ある問題にぶつかるのである。各種報道機関がこぞってこの身替りか否かの問題を取上げたが、その観察にはこぢつけが多かったといえる。高鳥修は、これら報道機関が論ずるように、田中彰治の代替人物象徴としては登場していないのである。

田中彰治は、昭和二四年総選挙において、五万七千票弱の得票を得て当選した。これは、この地方では、旧民政党系を中心に存在した旧民主党の荆木一久の得票を二万八千票に引下げ、その後の荆木一久投票集合の解体を導いていったのである。昭和二二年総選挙において、荆木の得票は四万二千票強であった。

この荆木投票集合の二万八千は、旧民政党系政策派の系列集合と目されるが、荆木の政界からの引退に伴ない、塚田十一郎投票集合への反撥も手伝って、田中彰治投票集合に身を寄せたとみることができる。

戦後、昭和二〇年一一月、日本進歩党が結成されたが、新潟県支部は、二〇年一二月、発足した。当時の役員の中には、次のような人々が含まれていた。

支部長に小柳牧衛、幹事長に佐藤芳男、総務には今成留之助他一八名があったが、この中には、荆木一久、岡田正平が含まれ、顧問には、高鳥順作、増田義一らが含まれていた。

昭和二一年の総選挙は、現在の三区四区をもって新潟県第二区を編成し、日本進歩党は荆木一久四五、一二二票、吉沢仁太郎四二、八五一票で二名を当選させた。なお、この選挙で、日本自由党は、亘四郎六四、四二一票、塚田十一郎五八、八一一票、板倉治作四一、三〇三票で三名を当選させた。田中角栄は、日本進歩党より立候補し

たが、三四、〇六〇票で落選している。

昭和二一年五月、日本進歩党新潟県支部は、中央での民主党結成に伴ない、民主党新潟県支部の中核となって解消し、支部長に荆木一久、総務に十名が選ばれたが、この中には飯塚信太（後に宗久と改名）が含まれていた。

昭和二二年総選挙において、荆木は四二、一七五票で当選した。塚田は四二、四五一票で当選したが、この際、日本自由党の武田憲平は二三、五二四票で次点となった。

昭和二三年、民主自由党新潟県支部が結成され、支部長に亘四郎、幹事長に田中角栄、顧問に塚田十一郎、渡辺良夫らが指名されている。そして、昭和二四年総選挙では、第四区では、民主自由党から塚田十一郎六八、三〇八票、田中彰治五六、九三八票で当選、民主党荆木一久は二八、七五五票で次点となったのである。

その後、民主党は国民民主党と改名、支部役員も変つたが、総務の中には、松井源内、飯塚信太（宗久）、稲葉修らが含まれていた。二七年には更に、改進党に編成されてゆく。改進党新潟県本部役員の中には、幹事長に小笠原九一、情報宣伝部長に平田早苗の名が見える。かくて、昭和二七年総選挙では、自由党の田中彰治七九、三六九票、塚田十一郎四七、五五九票で当選、改進党の久保田才次郎四〇、六七六票で次点となっている。

昭和二八年、いわゆる「バカヤロー解散」と関連して自由党が分裂し、総選挙では、分裂自由党田中彰治七九、九七七票、自由党塚田十一郎六〇、五〇一票で当選した。

昭和二九年暮、日本民主党新潟県本部の結成が行なわれ、その役員を次の如く決定した。

会　長　松木　弘

副会長　安藤文平　藤縄清治　渡辺常世

幹事長　白井秀吉

常任顧問　北　昤吉　稲葉　修　佐藤芳男　亘　四郎　田中彰治　小柳牧衛
党務委員長　後明五郎作
組織部長　渡辺浩太郎
青年部長　遠山　作助
婦人部長　丹羽　美代
情報宣伝部長　平田　早苗

昭和三〇年総選挙は、日本民主党田中彰治七九、三八九票、自由党塚田十一郎五八、九五六票で当選、昭和三三年総選挙では、保守合同の結果、両者は自由民主党から立候補し、田中七五、五三〇票、塚田六二、五一〇票、昭和三五年総選挙では、田中八〇、五一〇票、塚田五三、五四二票の得票を示していった。

昭和三六年北村知事辞任後、塚田は県知事選に立候補当選して以来、塚田十一郎投票集合の帰趨が問題とされたが、昭和三八年総選挙には、十一郎の子徹が、無所属で立候補することになる。かくて、自由民主党から田中六二、一八七票、大竹太郎六一、七三九票、で当選し、徹も六〇、四五〇票で当選し、このため、昭和二二年以来当選を続けていた猪俣浩三は落選するに至った。

昭和四〇年、知事の任期満了に伴なう県知事選挙が塚田、吉浦、浦沢三候補により行なわれることになった。この選挙に先立ち、二〇万円中元事件が問題となったが、この中元事件の発端となった中元返却者は、飯塚宗久、平田早苗、渡辺常世、松井源内、高鳥修、市橋長助、岩村時次郎、角谷久次、佐藤熊太郎、金子政治らの県議であった。

戦後、第四区における政界の状勢をみると、この中で、田中彰治投票集合の中へ、荆木投票集合が吸収されてい

る状況をみることができる。

日本進歩党と関連し、この中へ吸収された投票集合としては、増田義一、高鳥順作を擁した民政党の系流を注目することができる。

いずれにせよ、田中彰治投票集合の中には、旧民政党系非政策派を中心としつつ、政策派をも含めたものとしての一つの集合が形成せられていたと考えられる。しかし、大竹の登場は、田中彰治投票集合の中での旧民政党系非政策派の分離を惹き起していったのであり、田中投票集合の中でこの旧民政党系政策派の占める比重は増大していったが、塚田十一郎が知事へ転進して以後、塚田十一郎投票集合を自己の系列へ組入れることへの期待を田中彰治は抱いた。然し、塚田十一郎投票集合が、その代替人物象徴としてその子徴を立てるに及んで、この期待はくづれ去り、大竹投票集合への分解過程の中では、是が非でも塚田投票集合を解体せしめるための攻撃を展開せざるを得ない状況に立たされた。田中は、かくて、道徳・倫理的に塚田投票集合の集合象徴を葬り去るため、昭和四〇年知事選挙において、いわゆる怪文書作戦を展開することとなったのである。この一連の動きよりみても、田中投票集合は極めて弱体な状況にあつたと推定せられる。従って、その後、田中彰治事件の衝撃の中で、「獄中からでも立てば当選させる」と発言するものがあったとはいえ、田中投票集合は解体への途を早めていった。

このような状況の中で、旧民政党系政策派は、彼ら独自の体制整備にその力を注ぐことになる。そして、彼らは、その運動象徴として、「市政刷新」、「明るい町づくり」等の抽象的・理念的象徴を設定して、各市町村でその運動を展開することとなった。このような、市町村単位の、「町を明るくする運動」の推進に当っては、従来、いかなる投票集合にも系列化されることのなかった、良識派のオピニオン・リーダーたちが、そのような運動主体はわれわれであるという形で参加していった。ここに、「市政刷新」、「明るい町づくり」等の抽象的・理念的象徴の

抽象化にもとづく「上越振興」という新たな統一的集合象徴が形成されていったのである。

良識派オピニオン・リーダーたちは、従来、いかなる投票集合にも系列化されることなく、是々非々的批判・賛同を行なってきた。そして、その故に、良識派を標榜したのであった。それ故にまた、彼らには、この種の抽象的・理念的象徴に対しては、彼らこそが、その運動の中核とならねばならぬという一種の使命感に襲われることになる。このようにして、上越振興同志会という集合が形成されていった。このようにして形成された、新らしいイメージを持つ集合が、選挙に際して、その人物象徴として何人を推すかが、一つの焦点となったのである。

旧民政党系政策派の中心と目される荆木一久、高鳥順作は、既に故人になったとはいえ、そのイメージはなお残つていた。また、二〇万中元事件では、その中元を返したグループに名を連ねていた高鳥修は、順作の孫である。このような事情を背景として、高鳥修は、登場することとなった。次点に終ったとはいえ、彼が、大竹にはげしくせまった得票の一つの秘密がそこにある。

高鳥の得票中、約一万票は、十日町市、中魚沼郡で確保されている。この地帯は、二〇万円中元事件を云々された昭和四〇年の知事選挙に先立ち、田中彰治投票集合の中核彰友会の総決起大会がいち早く開かれ、反塚田の運動は熾烈を極めた。田中彰治事件の衝撃は、この知事選挙の運動に対する批判と結びつき、この地帯の旧彰友会幹部は、四二年総選挙では、殆ど、沈黙をまもったのである。

十日町市、中魚沼郡は、大正九年の総選挙では、東頸城郡とともに新潟県第一一区を形成し、高鳥順作は、武田徳三郎とともに政友会より立候補したが、武田が当選した。大正十三年総選挙では、高鳥は中立で立候補し、武田を敗り、当選した。その後、高鳥は民政党に帰属し、昭和三年、新潟県が四区に編成替された時は、民政党から増田義一とともに出馬し、そろって当選した。なお、武田徳三郎は、政友会より立候補して当選している。

このような事情は、高鳥修にとっては、一つの有利な条件であったといえよう。

十日町市、中魚沼郡は、第四区の中では、異質の経済圏に属し、どちらかといえば、長岡市（第三区の中心都市）を向く。更に、中魚沼郡津南町は、長野県飯山を経由して長野市へ向く。更に、高鳥修が、若くして町長をやり、小笠原九一の跡をついで県議にでることとなった根拠地、西頸城郡能生町は、上越とはいえ、直江津市、高田市、新井市を中心とする地帯からはずされた存在であることは、この十日町、中魚地区の有権者が、他の候補者よりもより多く彼に牽引せられる要素を含んでいたともいえる。即ち、第四区の中でも、ともにいわゆる主流からはずされているという一種の感情が、これらの地区のオピニオン・リーダーを高鳥へ傾斜せしめたと見ることができる。

いずれにせよ、高鳥修は、新しく形成せられた集合の人物象徴となったのであり、強いていえば、中間に断絶があったとはいえ、旧民政党系政策派の人物象徴高鳥順作・荆木一久の代替人物象徴ということができるにすぎない。しかし、彼は、田中彰治投票集合の代替人物象徴ではなかったのである。

このような高鳥の登場は、旧民政党系非政策派を母体に、その投票集合を固めようとしていた大竹にとっては、重大な脅威となった。かくして、大竹派は、その投票集合の強化に狂奔することとなり、それが、数多くの選挙違反被疑事件を生み出してゆくことになった。

第三区においては、前衆議院議員亘四郎の知事転進に伴ない、その投票集合に系列化されていた部分集合の帰趨が一つの焦点であった。然し、この投票集合における系列化は必ずしも強固なものではなかった。そのため、この投票集合は、代替人物象徴を立てることなく、自民党系の他の投票集合の中へ平穏裡に系列化されていった。そして、このことが、第三区における選挙違反被疑事件の件数を少くした一つの理由でもあった。

第一区における松井誠の引退に伴なう県評議長米田東吾、第二区における井伊誠一にかわる阿部助哉の登場は、社会党関係候補者についての投票集合における人物象徴の代替・選択がどのように行なわれるかについて、前述の象徴の代替と異なった事情をわれわれに示す。ただ、第四区における猪俣当選の背景の中では、猪俣投票集合に系列化された部分集合相互間の勢力均衡の問題が現われてくるのであり、この点で、田中彰治投票集合内部の事情と同じ矛盾を含んでいると見ることができる。即ち、民社党系候補の登場しない事情の中で、猪俣投票集合は、ある安定性を保ちうるが、同盟系青海電化労組の帰趨に見られるように、不安定性を内包しているのである。

三、投票集合の基礎的部分集合としての基底小集団の問題点

一般的にみて、候補者の固定化が進行する中で現われる地域社会の構造上の問題は注目を要する。通常、投票行為の分析に当って使用せられる指標としては、自主的選択、他律的選択とか、政策志向型、人物志向型とか、合理的選択、情緒的選択とかの類型表示が用いられるが、これらは、候補者と有権者個人の問題としての分析を志向する際の問題点にすぎない。このような指標が有効なことは、いうまでもない。しかし、買収、饗応のメカニズムや、選挙における金の行方を考えるとき、このように個人に分解せられた有権者の分析からは、得るものは少ないのである。むしろ、地域社会の構造上当然に問題とされるべき基底小集団の、投票集合への系列化の問題こそ、この種の謎の解明に対して有効な役割を果たすものといいうる。

よい意味でも、また悪い意味でも、ともかく地域社会のオピニオン・リーダーと呼ばれる人々は、何らかの意味で、基底小集団の人物象徴としての意味を担っている。そして、彼らは、立候補者の固定化の中で、何人かの投票

集合に対して、自他共に認める形で、系列化されている。

この系列化は、合理的な討論の過程をへて、異なった意見の中から共通意識を形成してゆく中でつくり出されるものであるよりは、情緒的に生み出された一体感、連帯意識を基礎として行なわれる場合が多い。

人間が、十分に個体化され、主体化されていない所での人間の集合は、情緒的な絆をその結合の基礎に持ちがちである。そして、人間の個体化、主体化を確立する基礎は、その経済生活におけるある程度の独立である。経済的貧困を始めとする各種の貧困の支配する環境の中では、人々は、情緒的連帯感に伴なう安定ムードの中に埋没してしまう。それは、人生への諦めの感情とも伴なって生ずる一つの行動様式である。他人と同じように行動しさえすれば、同じようなことができさえすれば、他人より以上の生活はできなくとも、それ以下におちることもまずない。徳川幕藩体制の下に存在した「生かさず殺さず」という政治の指導理念は、各種の貧困の中に生き続けている。総合開発、観光開発、社会開発等のキャッチ・フレーズが、政府によって叫ばれたとしても、それは、いつか遠い未来における生活向上への期待を呼び起こすことはあるが、人々の意識の中に、文化的生活との格差が強く意識され、貧困より離脱しえないむなしさを、その胸の中へ拡げてゆく。

都市の大企業が、そのボーナスを十万円代で云々することが多くなった昨今でも、新潟市周辺の企業においてさえ、一ケタ下の段階で事が論ぜられる。平場農村地帯の青年層は、確かに、都市周辺の企業・工場に吸収されている。しかし、その現金収入は、決して大企業従業員のそれには及ぶべくもない。われわれの行なった一つの農村調査の中では、年収四〇～五〇万の収入があれば、農業から転業してもよいと答えたものが意外に多かった事実は、農民の貧困がどのような種類のものかを推察する上で、一つの参考となるであろう。

このような状況の中で、投票集合の最底部に考えられる単位基底小集団の形成が行なわれている。

最も素朴な単位小集団が、血縁集団であることはいうまでもない。本家、分家、姻戚の絆は、未だ決して消滅してはいない。そして、この血縁集団の持つ情緒的な結合紐帯の各種変様が、地域におけるオピニオン・リーダーを一つの核としつつ、小集団形成の基礎となっていることを無視しえない。

一つの変様は、疑似血縁集団の存在にみられる。魚沼・頸城の山間部には、捨親を中心として形成せられた人間集合がある。捨親は、山村の貧困が生み出した一つの慣行である。貧困の中でつぎつぎと生まれる子供が育たない悲劇を経験する人々は、生まれ出た子供を丈夫に無事に育て上げようとする切なる願を抱く。そして、この親たちの志向は、その子供を、生後一定期間内に、一旦、捨てる行動を生み出した。この際、拾って短期間育てて貰おうとする相手には、何日の何時、どこそこの場所へ、どういう形で、捨て子すると通報するのが通例とされている。この捨て子は、始めから救済されることが予定されている。この捨て子を、極めて短期間育て、実の親に返すまで、その親代りをつとめるものが捨親なのである。この慣行の生まれた理由は明確ではない。血縁集団に埋没することにおいて生存を保証される環境の中で、親に捨てられること程、悲劇的なことのないことはいうまでもない。また、予め拾って育てるものが予定されているとはいえ、何らかの偶然が、その子の生命を奪い去るかも知れない。いわば、その子は、生死の境を彷徨することにもなる。このような人生における最大の悲劇は、一人の生涯の中で、二度と起るものではないといいう一つの確信が、このような慣行を生み出したとする説がある。それは、余りにも悲しい慣行でありつつ、今なお残存しているのである。

魚沼の山中でも、また十日町市内でも、「誰某は、私の捨親です。あの人がこんどはA候補を支持している。私も、もちろん、Aだ。あの人を捨親にしている人は、誰某、誰某。皆Aですよ」と語る言葉をきくことができる。およそ、この種の捨て子ではあっても、それを育てるためには、山村にあっては、かなりの素封家であることが必

要である。いわば、部落のおもだち的存在にして、はじめて可能であるともいえる。部落のおもだちの影響力の強さの一つの秘密は、このような所にもあるのである。

大竹投票集合の中には、農山村における、バス利用の旅行会があった。由来、山村部、農村部を走るバスの停留所は、部落の名士、おもだちらの家の前に設置せられるとともに、バスの切符販売も、それらの家で行なわれることが多い。これら切符販売所を中心に旅行会を結成することが行なわれている。それは塚田投票集合内における「講」と類似の性格を有する。この旅行会や講は、現在、情報の貧困、レジャー的文化的貧困の中に生き続けているものである。（講の単位小集団としての問題点は、平和経済計画会議「総選挙の研究」一九六七年八月一〇日刊の中で、一つの報告を試みてある）

明示的かつ自発的であれ、黙示的かつ他認的であれ、小集団のリーダーとなるものに、医師の存在、その影響力を無視することはできない。第二区北蒲原郡黒川村の山の中から立会演説を聞きにでて来た婦人が、隣の中条町までわざわざ武見太郎の演説を聞きに出かけていった。武見は、渡辺肇の応援演説に来たのである。医師会を味方につけることは、選挙を有利に進めるために必要であるとは、山村部において特に囁やかれている。魚沼、頚城の山村の人々は、こう語る。「気分のいいもんじゃありませんよ。脈をみながら、今度は誰某を当選させたいと、一人ごとみたいにつぶやかれれば、さからう気はおきませんよ。その医者以外に医者はいないんですからね。」すなわち、医師の診療範囲内には、医師を象徴とする一つの単位小集団が存在しているといえる。

あるいは、小集団リーダーとなるものに、僧侶の影響力もある。生きている間が、つらければつらい程、死後の世界の平安を求める心も強く、坊さんのありがたいお経に救を求める人々は、僧侶の影響力の中に立たされる。

医師も、僧侶も、情報不足の農山村に、各種の情報を運ぶ使者としての性格がある。この点を忘れては、農山村

における基底小集団の問題点は解明せられないことになる。

四、新潟県における人間結合の問題点

農協組織が、山村にまでくまなくゆきわたり、農民金融の面でも、ある役割を果して来ているとはいえ、血縁的集団、疑似血縁的集団、相互扶助的集団等を中心とする人間結合の比重は大きい。そして、このような人間結合は、貧困の中で、その存在性を確保して来たし、また確保し続けることとなろう。従って、このような人間結合を選挙に利用することは、このような人的結合の存在性をそのまま持続し、承認することと通ずるものを持つ。その限りでは、このような人的結合の存在の基盤である農山村の貧困を解決しようとする意気と熱情を示すものではなく、かえって逆に、その貧困を温存しようとするものであるといえる。

第三区において、亘四郎が県知事に転進した後、亘投票集合の帰属が云々せられたが、この集合の各段階のオピニオン・リーダーに対して、社会党の三候補がついになにごともなしえなかった理由を一体どこに求むべきなのであろうか。

社会党の行なう、総選挙の総括・反省は、常に日常活動の不足という言葉を伴なう。この日常活動の不足という言葉が、社会党の選挙反省に現われて以来、時は久しく流れた。そして、その言葉をいまだにくりかえす所には、社会党の反省不足をきびしく問題にしなければならないであろう。貧困の上にあぐらをかくものが自民党であるとすれば、社会党は貧困をすどおりしてまかり通ろうとしているのである。貧困の実態が、何に由来するかを真剣に求め、この貧困を脱脚するための方途を真剣に追及する姿勢に欠けるものは、一体、何人であるのか。自民党の各

候補は、貧困の中にうごめく民衆の行動態様について、なにがしかの認識のあることは、明らかである。その限りにおいて、自民党の行動様式の模倣を求める社会党系オピニオン・リーダーの行動を、社会党はそもそもどのように評価・分析・批判して来たのであろうか。「わが村の発展は、観光開発にあります。」なぜ、社会党系オピニオン・リーダーが、自民党系オピニオン・リーダーの口真似をしなければならないのか。地域ぐるみの娼婦化とまで呼びたくなるような観光開発に、なぜ、自己の地域の浮身をやつさせようとするこのキャッチ・フレーズを叫ぶのであろうか。美貌と裸体を売物とする娼婦が、凌辱の果、再び人間として立つことのできぬ境涯に身をおとしてゆくような、地域ぐるみの娼婦化と称すべき観光開発のキャッチ・フレーズに、社会党系オピニオン・リーダーも、なぜ、口調を合わせるのであろうか。

彼らは、社会党を標榜しつつも、なお、その行動様式は、自民党系オピニオン・リーダーのそれと、なんら異なる所はないのである。

彼らは、自民党系のそれと同じく、貧困の上にあぐらをかいて、その身の安泰を求めているにすぎない。彼らは、今や、安易な道を歩みつつある。昔の仲間意識に支えられ、昔日の小作争議の追憶の中で、犬や猫が仲間の傷口をなめあうように、生きているにすぎない。昔日の小作争議時代のリーダーたちが、東奔西走、席の暖まるのも知らずとび廻り、農村社会の貧困に挑み、それを除去する可能性をつかみ、農民の中に潜む発展の可能性を育て上げようとした、その努力の片鱗すらもみせない。彼らは、苦しさときびしさの中から、自己の地歩を固めて行く姿勢を忘れている。「米づくりはバクチだ」と言いながらも、肥料を海外へ安く出す位なら、国内の農民に、それを安く分けることはできないのか、そうすれば、コストを下げることも出来るのだと叫ぶ若い農民の、農業に生き抜こうとするその意欲を、国の政策へ昇華してゆく能力と情熱に欠けた彼らの行動は、まさに、農村の貧困をすどお

りするばかりか、その上にあぐらをかこうとしているものと言わざるをえないものがある。

地域社会の持つ矛盾の根源を追及し、地域社会の持つ潜在的発展力をつかみ、それを育てあげる方策を樹立しようとする努力、それは、いやしくも体制に対する批判を行なわうとするものが最低限努力すべきことがらである。

このような努力不足は、若い新しい有権者を、彼らの単位小集団に組み入れることを不能にしているのである。

そもそも、古い農業形体の中では、人々は、三反あれば、老夫婦なら生活してゆけるという、一つの観念を持っていた。これは、特に街へでて働き、停年で退職した後、なにがしかの退職金と年金で暮してゆこうとする時、三反の田畑が人々の心に一つの安らぎを与えるものであったことを示している。そして、この観念は、今もなお存在している。昭和四一年夏、K郡T町の山村部の小・中学校長A氏は、彼の学校のモットーは「土地を耕すよりは頭を耕せ！」であると語った。この山村部落には、今もなお、焼畑農業の形体を残している。それは、都会地からはるかにはなれた山あいの部落である。そして、この部落からの脱出は、まず比較的近いK部落の土地を求めて降りる。そして、K部落の人々は、L部落の土地を求めて降りる。L部落からK市へと降りてゆく。それは、丁度、山くずれと同じ形をとってゆく。しかし、土地を求める資金を入手できぬ人々は、この貧しい郷土にしがみついて生きてゆく以外に道がないのである。このような貧しい郷土からの脱出、それは、このような地帯にすむ人々の悲願でさえある。人生の向上を、郷土よりの脱出にしか求めえない地帯、このような地帯にこそ、上記の教育理念が生まれてくる。

この学校への道を尋ねた時、にこやかな笑顔でその道を示してくれた少女、また、スレ違う時、さわやかな挨拶をして去った児童たち、その表情の中には、貧困山村部落のかげりはなかった。しかし、それでもなお、彼らの肉体外観は、都会地の同年輩の子供たちに比較した時、いくつかの点で劣っているのであった。

三六年六月一日現在、僻地振興法施行規則に定められた基準に従って、僻地学校に指定された小学校は、新潟県で、本校・分校をあわせて三〇六校（全県の三九％）であった。また、中学校は一二一校（全県の二七％）であった。四二年二月二一日現在の資料によれば、小学校・中学校それぞれ二九七校、一〇三校となっている。

僻地指定校の全国平均比率二四・四％（小学校）、二一・五％（中学校）をはるかに上廻っているのである。しかも、その児童数をみると小学校は三二、六六〇人で全県の一一％、中学校は一六、三〇四人で全県の八％を示し、ここからも、これらの小・中学校が、いかに小規模校であるかを推定しうるのである。

これらの学校を取巻く社会の職業構成は、第一次産業を主体とするものであり、同質的な社会であることが判る。しかも、そこには貧困家庭が多く、部落単位による小集団居住がみられ、自ら、保守的、閉鎖的な側面が現われてくる。

これらの地帯における貧困は、地域住民の食生活、栄養、そして健康に影響を与えてゆく。新潟県薬事衛生課がまとめた昭和四〇年県民栄養調査によれば、食生活については、次のような状況が現われてくる。

主食となる穀類について、市街地を一〇〇としてみると、山間部では一一八、漁村一一二となるが、穀類中の米についてみると、市街地を一〇〇とした場合、山間部で一三八、漁村一三五となり、米乃至穀類の摂取が異常に高いことを示している。そして、この米乃至穀類の摂取が多いことは、勢い他の副食物摂取の質的低下と結びついている。動物性食品の摂取は、山間部では低く、バランスのとれない状況を示す。

食生活におけるひずみは、何によって生ずるのであろうか。いうまでもなく、鮮度をおとさずに輸送しうる範囲が狭いために起るものである。それは、輸送技術の弱体、道路の不整備、これらのもたらす流通機構の不備に基づいている。特に、山間部が豪雪地帯であり、ほぼ半年は雪に埋もれている地帯が多いため生鮮野菜等にも欠ける面

が現われる。彼らが養い育てる動植物も、産米が少ないため、米との交換に用いられる場合もあり、彼ら自身の口に入ることは少ないといわれている。植物性脂肪の補給は、かなり古くから、荏油等によって行なわれていたという。今日では、干魚・塩魚・罐詰等が多く出廻り始めたが、輸送費の関係でコスト高となるため、やはり接触の機会は少くなる。

修学旅行に都会へ出た子供たちが、教師のいろいろな説得をはねのけて、米の飯と漬物だけを食べ、他のおカズをすべて残しながら、「ああ腹がはった」と詠嘆した物語りは、こうした農山村の貧困さをわれわれに象徴的に現わしているといえよう。彼らは、見たことも、味わったこともない食品は、すべて残してしまったのである。それは、古くより云われて来た、米のメシを食べなければ、力がつかないという言葉と接続している。それは、災害時、タキ出しと称して、ニギリ飯を被災者に配給しようとする行政機関の態度と接続するものをもっている。生かさず、殺さず、その生命を持続した人々の悲劇的な現実を示している。

このような環境の中で、人々は、同じ環境の中に生きる人同士、互にその傷口を癒し合って生きてゆく。彼らは、連帯のムードの中に埋没し、ムード的共存意識の中に停滞する。そして、個体として、その主体性を確立することもなく、自然的連帯感の中に安住してゆくのである。そして、そのことによってまた、人々は、独立の個体として確立される道を、自ら閉じてしまう。彼らは、現実的、技術的に、現在の貧困を克服する手段を求め、人間生活の進歩と向上を求めるよりは、道徳的、倫理的に問題を処理する傾向を強く示すことになる。この際作用する道徳、倫理は、彼らの共同生活安定の原理である。人々は、一定の鋳型の中にはめこまれ、それぞれの持つ可能性を無限に伸ばしてゆくことはできない。新潟県内で行なわれた各種の意識調査の結果を静かに直視すれば、このような道徳的、倫理的解決へ傾斜する傾向と、何時訪れるとも判らぬ未来の栄光への期待とを見出すことができる。

このような行動様式は、現実的、技術的に問題を解決された経験の欠如、すなわち、政治的貧困と行政的貧困の中で、経済的貧困、文化的貧困、レジャー的貧困からの脱出を不可能とされていることに由来する。自然的連帯感の中への逃避と埋没が、彼らの安全を確保する風土がそこにある。そして、そのような風土の中で、個体としての独立性を確保し、または確保しようとする人間存在は、異端として排撃されることになる。無限の個性的展開、個人の創造性の無限の開発を求めての人間像の提起が叫ばれることはなく、自然的秩序に適応し、その中で個性を歪めあってゆく人間像が求められる。従って、このような状態からの脱出は、自らの環境の整備、開発の中に求めることはなく、環境それ自体からの脱出の行動様式を生み出す。そこに東京の空気を吸うものへの羨望が形成され、地元へ残るものへの過小評価、地元脱出者への過大評価が現われてくる。

投票のメカニズムの分析を、候補者と有権者個人の結合形態の中に求めず、むしろ、投票集合内部に存在する部分集合としての単位小集団とその形成要因の分析によって代替しようとした、この試みは、まさに各種貧困の支配する新潟県の現実の中では、一つの意味を担いうる筈である。